追悼　大島哲也先生

大島先生のこと

三原市城町／内科　小園　亮次

去る令和4年4月26日、西区己斐の大島内科院長、大島哲也先生が急逝されました。享年68歳。先生は広島大学第一内科講師、臨床検査医学の助教授そして循環器内科の准教授の職を歴任し長年にわたり高血圧の専門家としての信望を集めてこられました。その後お父様の跡を継ぎ西区己斐で開業された後も、その独特の個性と存在感を失うことなく、高血圧の「ご意見番」として活躍を続けられました。

大島先生が数年前から複数の癌を次々と患っておられたことは周知の事実でした。しかし、それらはことごとく早期に発見され、最良の治療が選択されたため、はた目から見た先生の姿は闘病中のイメージとは無縁で、先生はきっとこのまま癌から逃げ切っていかれるに違いないと予想していました。事実、亡くなるわずか数週間前まで、我々を含め多くの友人や後輩と酒をすら交えて会食を続けておられたのです。しかし最後の日は予想外に早く訪れました。いったん緩解していたリンパ腫が一気に再燃し癌性髄膜炎をひきおこし、先生はわずか一週間余りのあいだに帰らぬ人となりました。急変直前にたまたま電話でお話しした時の印象では、本人もこんな急な展開になると予想もしていない様子で、今もまだ、自分がこの世を去ったことに気がついていないのではないかとすら思えます。コロナ禍の影響などから先生とのお別れの機会を逸した方々も多く、訃報そのものも十分行きわたっていない感があります。そうした状況で大島先生の人生がなんとなく、うやむやに人々の記憶から薄らいでいくとしたら、それはいたたまれない。せめて大島先生が我々に遺した足跡を身近にいた後輩の目から記録と記憶に残したい。そういう気持にかられ、この追悼文を書いています。

大島哲也先生
（写真提供：石田万里先生（広島大学））

大島先生はこの「医師協だより」に長年にわたって猫の連載を続けてこられました。したがって大島先生を「医師協だよりの猫好きの先生」としてしか知らない方々も多いでしょう。しかしその場合、先生についてかなり一面的なイメージをお持ちではないかと危惧されます。連載に投影されている大島先生の人間性は真実ではあるものの、そのごく一面に過ぎません。我々が慕ってきた大島先生の実像を「医師協だより」の読者の方々にも知っていただきたいというのも私の願いの一つです。

私が初めて大島先生に出会ったのは研修医として広島大学病院内科ローテーションにはいった頃です。大島先生は第一内科７研（循環器グループ）の「オーベン」クラスの先生でした。当時の先生の印象は色白の童顔で、絶えずハイライトを口にくわえ、ちょっと不良っぽい感じでした。と言っても、実は気を許した人々との間の会話に威圧感はなく、屈託のない笑いが魅力でした。後輩の面倒見もよくて研修医を集めては心電図を教えたりすることにはしっかりと時間を割いてもらっていました。

当時、大学院生であったはずですが大島先生は高血圧グループの「食塩と高血圧」研究を実質的に企画、実践していた中心人物でした。この時の研究成果はいくつもの英文論文になり、その後このテーマが広島大学の循環器・高血圧グループが全国に認知されていく屋台骨となります。当時のいわゆる「研究」は（広島大学に限ったことではありませんが）研究の体をなしていない時期にあり、大学に帰学しても何をしに来たかわからぬまま、またどこかの病院に配属されるということが度々おこる状況でした。この時期において大島先生は研究の発信に英語論文が必須であることに気づき、自らその執筆に取り組み、一流誌にいくつもの論文をのせたパイオニアであったのです。その後先生は留学という形で研究生活の駒を進めます。もちろん研究グループ初の留学でした。インターネットのない時代、コネのない研究者が留学先を探すのは、エアメールで名のある海外研究室に自己アピールの手紙を送り、採択の返事（何十分の一返ってくるのかわからない）を待つしかなかったのですが、このような方法でも立派な執筆論文リストがあれば十分受け手があり、実際大島先生も複数の米国の研究室からオファーがありました。Oregon Health Science University の D.A.McCarron 教授の元で数年間、さらに業績を増やし、帰国後は教室で高血圧グループの指導にあたりました。我々が研究の指導を受けたのはこの頃からになります。

大島先生の卓越した才能の一つは言葉を上手に操れるという点ではないかと思います。大学教員に必須の能力は予算獲得のための「作文のうまさ」と言われますが、先生の書く文章は常に簡潔で非常にわかりやすい。我々後輩たちが特に感謝しているのは論文添削のうまさ、そして早さです。人の文章を添削することほど難しいことはありません。

木戸幸司先生、大島先生、松浦秀夫先生
（写真提供：木戸幸司先生（広島グリーンヒル病院））

我々凡人は添削を頼まれても結局自分の文章に書き換えてしまうのがオチなのですが、大島先生は斜線や矢印を使って素材を残したまま文章を生まれ変わらせてくれます。

また卓越した言語能力は会話、交渉、時によっては喧嘩を有利に導く最強の武器となります。大島先生は大事な局面において相手を一言でピシャリと封じることのできる人でした。相手の本質を見抜くのも鋭かった。だから適材適所に人を配置して、強いチームを作り、さらに後進を育てるといった組織づくりに非常に長けていた人だと思います。事実、大学では弟子たちの多くが教授になり、要職につき、循環器グループの今を支えています。広島大学原爆放射線医科学研究所教授の東幸仁先生、福島県立大循環器内科教授の石田隆史先生、広島大学医系科学研究科（医）准教授の石田万里先生、広島大学循環器病学教授の中野由紀子先生はみな大学時代に大島先生の直接の指導をうけた弟子たちです。

大島先生自身はしかし、大学で自らトップに昇り詰めることなく開業して楽しい人生を送られました。このことを心からよかったと感じておられるのは大島先生自身でしょう。先生の中に貫かれたポリシーがあったとするなら、それは自分が楽しいことしかしない。自分が好きなことしかしない。そして人の目は気にしない（気にならない）。ということであったように思います。大学で研究を主導したのは、それが好きで面白かったから。大学の仕事には明らかに適性があったでしょうが、人生の流れは大島先生を教授に押し上げるようには働かず、また本人も地位にしがみつく気はサラサラなかったように思えます。

興味がわくと、とことん突き詰めるタイプで、例えばグルメでは常にどこの何が一番うまい、どの料理法が一番よい、と常に最良のものランキングが確立されていきます。その徹底ぶりはちょっと独特でした。臨床検査医学で助教授だったころラーメンに「ハマって」昼休みはすべて全部ラーメン屋巡りに充てておられる時期がありました。情報収集は貪欲で広島市全域といわず呉市まで足を伸ばし、1回の昼休みに3店舗すべて汁まで完食して帰ってくるといったようなことはザラでした（減塩の研究者だったんですが……）。ちなみ

送別会にて（2009年3月24日）
後列左から鈴川睦夫先生、吉栖正生先生、沢近紀夫先生
前列左から木原康樹先生、河野修興先生、大島先生、松浦秀夫先生
（写真提供：寺川宏樹先生（JR広島病院））

に最終的な第一位は呉市の「龍珍」だったか広島市の「八戒」だったかと記憶します。

このように「ハマった」対象は多岐におよび、私がリアルタイムで目撃しただけでも映画、海外旅行、食べ歩き、飲み歩きなど。猫好きは前からですが晩年その勢いは加速していました。「ハマった」対象には独自の理論が構築されており「研究」というのは大島先生の楽しみの一つだったのでしょう。

グルメは大島先生の生涯を通じて最大関心事の一つでした。特に興味の中心にあり続けたのは肉とその焼き方でしょう。一緒に食べに行くと料理人に対して肉の知識をテストしにかかるので、少々困る場面もしばしば。一方、認めた店へのリスペクトは守る人でした。その他、食の関連でワイン、アナゴの刺身、通販でウニや高級食材の爆買い、晩年は手料理などと「ハマる」食べ物は次々変遷していきましたが、そのたびに増えていく知識とあくなき探究心には端で見るものも巻き込まれずにはおかない引力がありました。グルメに関して私はこの10年ほど毎月きっちり2回開催される食事会の参加者として楽しい時を過ごしたのでした。

極端に好きなものを追求する一方で知らないことは全く知らないというのも大島先生の面白いところでした。先生が40歳になった頃、「最近なんか目が見えん」とこぼしておられたので「そりゃ老眼でしょう」と言ったところ、なんと「老眼」という概念をご存じなく、説明すると「ああ、それでじいさんたちは虫眼鏡で新聞を読みよったんかあ」と納得されていました。このように大島先生にはどこか少年っぽい、ヤンチャなとこがありました。たとえば高校のころ（西区の某男子校）山道を走るマラソン大会では秘密の近道に隠れてタバコを吸って途中で何食わぬ顔で合流していたとか、東京での学生時代は競馬にハマり、ただの趣味にとめとけば良いものをノミ屋家業に手を出し、ドジを踏んで夜逃げする羽目になったとか、逸話はいろいろあります。ごくたまにですが「ダチ」とか「スケ」とか、「シケこむ」なんていう語彙が飛び出すことがありましたが、おそらくは1970年代、今よりは随分とおおらかだった時代に東京で楽しい青春を過ごされたのだと思います。この時代の不良若者の象徴、ショーケンこと萩原健一が亡くなる少し前、先生が「ショーケンも年とったのう」としみじみ言っておられた姿が思い出されます。

こうして書き綴っていると大島先生がもういないなんて信じられません。先生にはいろいろ教えていただきました。私は後輩のなかではだいぶ叱られた方だと思います。これからもいろいろご指南いただけると思っていました。というより大島先生がこの話をどんな顔して聞くかな、というだけでも物事の方向づけが得られるような、そんな存在でした。そんなわけで私たちは後輩の中ではもう最年長クラスですが、もっともっと若い後輩たちの中にも同じように先生を慕っているものは、本当に大勢います。そういう魅力の持ち主でした。

ここ数年、先生は猫の連載にかなり情熱を傾けておられました。連載を始めたのは、今思うと最初の癌が見つかった頃だったような……。癌の苦しさと無縁のように見えていた先生は、それを全く表に出さずに猫に心の癒しを得ていたのかもしれません。癌のプレッシャーと人知れず闘う辛さ、それを思うと心が痛みます。しかし、先生はやりたくないことに振り回されることなく、自分の人生をたくさん楽しまれたと思います。そしてその姿をみてきた多くの後輩たちの心の中にこれからもずっと生き続けます。

どうぞ安らかにお眠りください。

（おぞの　りょうじ）